



祐介の目

大田ゆうすけ No.22
(福山市議会議員)

毎月1日号に掲載

水道事業を考える

今年3月の上下水道局市民意識調査によれば、前回と比較して水道水に対する安心度が高まり、味や臭いに対する不満が減少して水道水をそのまま飲む人が増えているそうだ。もともと福山市の水道水は決してまずくないが、先の意識調査

結果は原水を取水している芦田川が水質ワースト1を返上し、水質が改善されたというイメージアップが水道水をおいしく感じさせていると考えられる。特に市内中心部に配水している北本庄の出原浄水場の水はおいしいはずだ。出原は芦田川左岸に掘られた直径6m、深さ10mの巨大な7本の井戸から伏流水を取水して原水としている。出原浄水場は現在、平成27年度までの6か年計画で施設更新を実施しているが、市北部から芦田川左岸の一方通行の土手を南下すると井戸の配管工事の様子を見ることが

配されるが、出原の井戸は芦田川の表流水が涸れても余裕があるそうだ。今回の施設更新は50年前に掘った井戸はそのまま使用し、る過方式を緩速ろ過から急速ろ過に変更することにより「黒水」の原因となるマンガンの除去も効果的に行い、残留塩素監視装置によりカルキ臭も低下する。約40億円の事業費をかけて新旧のよい技術を取り混ぜたハイブリッド型の浄水場に生まれ変わる予定だが、市民周知ができていないのが、言いがたい。水道事業をもっと身近に感じてもらうにはどうしたらよいだろう。

まず、市制施行の原点となつた水道事業の歴史について学習する機会を増やすことが必要だ。熊野の水源池や佐波の浄水場跡など史跡も多く残っている。次に家庭や企業で取り組める水確保策として雨水貯留タンクの設置や、災害時の水の備蓄手段として太陽熱温水器を利用する方法がある。それぞれに補助金を出せば整備も進み、市民の水に対する意識も高まるだろう。出原浄水場の施設更新が完了すれば広大な空き地が生じる予定であり、サッカーグラウンド等に活用して市民が集える浄水場とし、施設見学も受け入れてほしい。